

房総里山芸術祭

ICHIHARA ART x MIX 2020

晴れたら市原、行こう。



企画発表会資料 2019年11月26日現在

房総里山芸術祭 いちはらアート×ミックス 2020

晴れたら市原、行こう。

「いちはらアート×ミックス」は「晴れたら市原、行こう。」をコンセプトに、2014年に第1回が始まり、以降トリエンナーレ形式で開催され、2020年が3回目の開催となります。

会場となる市原市は、千葉県の中央に位置する人口28万人の都市です。市の北部には日本有数の石油コンビナート群が立地する一方、南部には養老川の恵みがもたらす田園風景や先人たちが古来より守り育んできた美しい里山が広がり、春には満開の菜の花の中をトロッコ列車がのどかに走ります。都心や成田・羽田の両国際空港に近い立地ながら、人々の安らぎと共感を呼ぶ日本の原風景があります。その地域の魅力を起点に、本芸術祭は出発しています。

「いちはらアート×ミックス2020」のテーマは、「房総の里山から世界を覗く」。小湊鉄道五井操車場から養老溪谷までを縦断する100年の歴史をもつ小湊鉄道に乗って、駅舎や廃校や空家に展開するアート作品を巡る冒険が始まります。東京から50kmの「未触の空間」を【覗いて】ください。



開催概要

名称	: 房総里山芸術祭 いちはらアート×ミックス2020
会期	: 2020年3月20日(金・祝)―5月17日(日)
開催エリア	: 小湊鉄道を軸とした周辺エリア (五井、牛久、内田、平三、高滝、里見、飯給、月崎、月出、白鳥、養老溪谷)
主催	: いちはらアート×ミックス実行委員会
実行委員会会長	: 小出譲治(市原市長)
総合ディレクター	: 北川フラム
アートディレクター	: 豊福亮(アーティスト)
デザインディレクター	: 色部義昭(デザイナー)
広報アドバイザー	: 佐野弘明(市原市広報戦略アドバイザー)
出品作家	: 約60組/17の国と地域

作品展開エリア

■五井エリア

テーマ:「少年の夢、少女の夢(仮)」

五井駅構内にある小湊鉄道の車両基地であり、小湊鉄道の車両が配属されている。今もなお使用している鍛冶屋場や作業場、小湊鉄道のホームなどに 7~10 作品を展開。



ターニャ・バダニナ (ロシア)



アレクサンドル・ポノマリョフ(ロシア)



レオニート・チシコフ(ロシア)



チョアン・チーウェイ[荘志維](台湾) / 参考作品



アデル・アブデスメッド(アルジェリア)



ソカリ・ドグラス・カンブ(ナイジェリア) / 参考作品



ヨアン・カポージェ(キューバ) / 参考作品



キム・テボン(韓国/日本) / 参考作品

駅舎プロジェクト

芸術祭の開催エリアをつなぐ小湊鉄道は、懐かしい日本の原風景を走るローカル線。車窓から見る菜の花畑や、駅舎や列車のレトロな味わいから鉄道ファンからの人気が高い。この小湊鉄道の駅舎や周辺に作品を展開する。

【上総鶴舞駅】 駅舎 × 成田久(日本)



【上総久保駅】 駅舎 × 西野達(日本)



【里見駅】 ホーム × 喜動房倶楽部(日本、地域団体) / 参考作品



【飯給駅】 駅前 × 藤本壮介(日本)(上)、エルモ・フェアメイズ(オランダ)(下) / 参考作品



【その他の駅】 駅前 × レオニート・チシコフ(ロシア)／参考作品



■牛久エリア

上総牛久駅から歩いてすぐの牛久商店街にある、既に閉店した店舗や、今なお現役の洋品店の中に作品を展開。



マー・リャン【馬良】(中国)



中崎透(日本)／参考作品



柳健太郎(日本)／参考作品

■高滝エリア

2013年、ダム湖である高滝湖の東岸に「市原湖畔美術館」としてリニューアルオープンし、市の芸術文化による地域づくりの拠点となっている。



KOSUGE1-16(日本)



クワクボリョウタ(日本)



アコンチ・スタジオ(アメリカ)



ウラジミール・ナセトキン(ロシア)



ニブロール(日本)／参考作品



深澤孝史(日本)

いちはらアート×ミックス 2020 連動企画展「中国現代美術展 紙上談兵(仮)」

古代中国の4大発明:羅針盤、火薬、紙、印刷の一つ紙を素材に中国の現代作家 7~10人で構成される展覧会。

企画=HUBART | キュレーター=テイ・イアン

■平三エリア

テーマ:「子どもたちの希望の学校(仮)」

2016年3月に140年の歴史に幕を閉じた平三小学校に約10人の作家が展示する。体育館では地域の方々による「おもてなし交流プログラム」も実施。



ザンナ・カダイロバ(ウクライナ)/参考作品



ミカーラ・ダウアー(オーストラリア)/参考作品



マリア・ネボムセノ(ブラジル)



ラヴァル・モンロー(バハマ)/参考作品



大野修平(日本)



栗真由美(日本)/参考作品



秋廣誠(日本)



富安由真(日本)/参考作品



曾我英子(日本)/参考作品



長谷川仁(日本)/参考作品



開発好明(日本)/参考作品

■里見エリア

テーマ:「運動会とキッチン」の里見(仮)

2013年に閉校した小学校を2014年のアート×ミックスにて建築設計事務所 みかんぐみが再生。2014年からはじまったおにぎりを美味しく食べるための運動会を開催したり、オフィシャルツアーのランチや子どもたちに人気のモグラハウスも出現。



EAT&ART TARO(日本)



開発好明(日本)



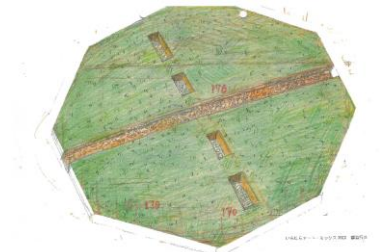
米澤文雄(日本)／参考作品

■月崎エリア

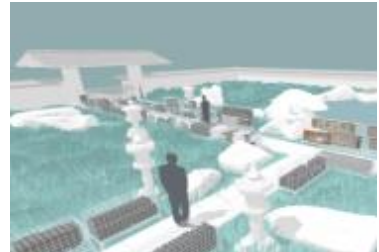
月崎駅前にある2014年の第1回からの人気作品「森ラジオ ステーション×森遊会」、77万年前に最後に地磁気逆転現象が起きた様子が観察できる地層「チバニアン」の周辺や、空家のビフォーアフターを楽しめる「三神邸」などが展開。



木村崇人(日本)



磯辺行久(日本)



アイシャ・エルクメン(トルコ)



小沢敦志(日本)

■白鳥エリア

テーマ:「保育園のアトリエ(仮)」

上総大久保駅から徒歩圏内の、既に閉所した白鳥保育所を会場に。女性作家のアトリエの風景を垣間見ることができる。白鳥公民館ではパフォーマンスイベントを開催。



前田エマ(日本)



篠崎恵美(日本)／参考作品



高山夏希(日本)／参考作品



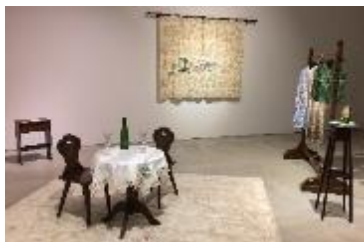
大杉祥子(日本)／参考作品



石田真澄(日本)／参考作品



五所純子(日本)／参考作品



高田安規子・政子(日本)／参考作品



CLIP(日本)



カルロス・ガライコア(キューバ)



伊藤キム(日本)



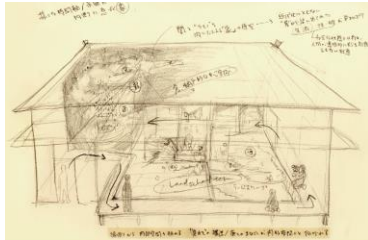
時速 30 kmの銀河の旅(日本)

■月出エリア

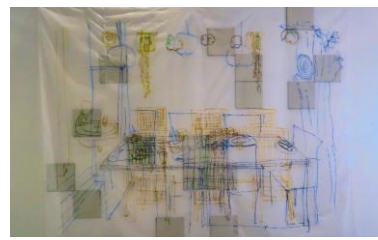
月出工舎は2014年から岩間賢のディレクションのもと、旧月出小学校をリノベーションし、「遊・学・医・食」のプロジェクトを展開。



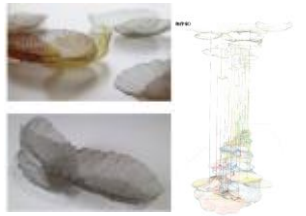
岩間賢(日本)



田中奈緒子(日本)



竹村京(日本)



岡博美(日本)



チョウハントオル(日本)



岡田杏里(日本)



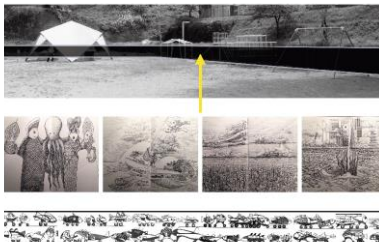
鈴木敦夫(日本)



舞踏団 トンデ空静(日本) / 参考作品



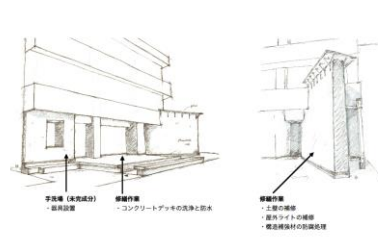
トーマス・レーメン(ドイツ)



ヘラルド・バルガス(メキシコ)



来田広大(日本)



塩月洋生(日本)



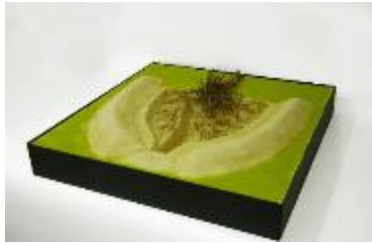
風煉ダンス(日本)

■養老溪谷エリア

溪谷や温泉郷など、千葉県内有数の観光地が点在しているエリア。



マルニクス・デネイス(オランダ) / 参考作品



竹腰耕平(日本)

■広域展開

2014年の芸術祭で小湊鉄道の列車内、駅やトンネルを演出に取りこみ人気を博した指輪ホテルや、メインビジュアルのフォトグラファー・石塚元太良が作品を展開。



指輪ホテル(日本)／参考作品



石塚元太良(日本)

■おもてなし交流プログラム

いちほらアート×ミックス会期中、地域の方々が主役となって来訪者に千葉県・市原市の魅力を伝え、おもてなしをする「おもてなし交流プログラム」を開催。地元ならではの食事やワークショップ、体験プログラム、イベントを楽しむことができる。

開催日: いちはらアート×ミックス開催期間中の土日祝日を中心とした41日間

会場: 内田未来楽校、旧白鳥小学校、その他市原市・近隣市町村内各所



メインビジュアル

グラフィックデザイナー色部義昭 × フォトグラファー石塚元太良

2014年の第1回に続き、色部義昭にデザインディレクターを依頼。また、写真は作家としても出展する石塚元太良が担当した。原風景に広がるトンネルや小湊鉄道、工業都市といった市原市の表情を切り取った中から、今回のテーマ、「房総の里山から世界を覗く」をイメージさせる、冒険の入口のようなトンネルの写真を起用し、メインビジュアルを作成。



参加作家 2019年11月25日現在／ファミリーネームABC順

アデル・アブデスメッド Adel Abdessemed

1971年アルジェリア生まれ。パリ在住。ビデオ作品を中心に国際的に活躍。MoMA PS1、ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展、サンパウロ・ビエンナーレ、ポンピドゥー・センターなど、国際的な注目を集める展覧会でたびたび物議を醸す作品を発表してきた。



アコンチ・スタジオ Acconci Studio

1988年、ヴィト・アコンチ(1940年アメリカ、ニューヨーク市ブロンクス生まれ)により設立。デザインや建築のワークショップとして活動を始めた。それ以来、彫刻、家具、工業デザイン、建築といった境界を越えた作品を発表している。



秋廣誠 Makoto Akihiro

レンズやゼンマイを使用したキネティックなオブジェの制作や、人間の視覚を比喩的にとらえた作品などを発表。近年は流体可視化技術をディスプレイに応用する研究を実施。INAXギャラリー2、表参道画廊などで展覧を開催。



ターニャ・バダニナ Tanya Badanina

1955年ロシア、ニージニイ・タギル(旧ソ連)生まれ。「白」、「光」、「天への回帰」をテーマに、油彩、グラフィック、インスタレーション等を制作し、翼や白い衣服を主題とする作品を発表してきた。「白」は、追悼、死の浄化、魂の開放、天使の色だと本人は言う。



舞踏団 トンデ空静 Butoh Art Company TondeKarashizuka

松原東洋を中心に、舞踏家、音楽家、美術家など多様な人間が有機的に集まり、2006年富山県の酒蔵を劇場化して旗揚げ公演を行う。既成の劇場のみならず面白いと思った場所での公演や映像製作なども手がけている。



ヨアン・カポーテ Yoan Capote

1977年キューバ、ピナル・デル・リオ生まれ。ハバナ在住。



チョアン・チーウェイ[莊志維] CHUANG Chih-Wei

1986年台湾、台中生まれ。芸術と建築という二つの背景を持つ莊志維は、光と空間を用いてインタラクティブインスタレーションを創作し、人と環境の相互関係を探り極めることを得意とする。



チョウハシトル Toru Chohashi

1979年生まれ。自身が設立した「やきいも日和」で、古き良き日本の食文化である「焼き芋」を継承する焼き芋家として活動を経て、2019年春より湯河原の「杓巧舎」にて昔ながらの手刻みによる家づくりをする大工をしている。



CLIP

1997年、有限会社一級建築士事務所CLIP共同設立。現在、松永英伸(1964年生まれ)、棚橋国年彦(1965年生まれ)、設楽壮一(1964年生まれ)、金子友美(1965年生まれ)の4人のメンバーで運営。



マルニクス・デネイス Marnix de Nijs

1970年オランダ生まれ。1992年に彫刻家として学業を修了し、彫刻、公共空間、建築に初期のキャリアを投じた。90年代半ばから、芸術におけるメディアとテクノロジーの実験的使用のパイオニアとして活躍している。



ソカリ・ドグラス・カンブ Sokari Douglas Camp

1958年ナイジェリア生まれ。セントラル・セント・マーチンズでファインアートを、ロイヤル・カレッジ・オブ・アートでデザインを専攻。イギリスとナイジェリアを代表し、国立アフリカ美術館、スミソニアン博物館、ロンドン人類学博物館などの会場で40以上の個展を開催した。



ミカーラ・ダウアー Mikala Dwyer

1959年オーストラリア、シドニー生まれ。シドニー在住。インスタレーションを基本とし、身体との強い関連性を持つ素材を使用して、ギャラリーの従来のアーキテクチャ内に特異な個人空間を構築する。



EAT&ART TARO

1979年神奈川県生まれ。食をテーマに活動している現代美術作家。調理師学校卒業後に飲食店勤務を経てギャラリーでのケータリングや美術館のカフェプロデュース、食に関するワークショップや作品制作を行う。



アイシャ・エルクメン Ayşe Erkmen

トルコ、イスタンブール生まれ。ベルリン/イスタンブール在住。彼女の作品は、現地の社会的および物理的な環境を背景として既存の構造や状況に入り込み、新たな解釈を与える。サイトスペシフィックな作品を通じて、社会化の模範型に言及しており、現実社会を展開したその空間では観客や参加者がいてはじめて作品が完成する。



藤本壮介 Sou Fujimoto

1971年北海道生まれ。94年東京大学工学部建築学科卒業、2000年藤本壮介建築設計事務所設立。主な作品に「Serpentine Gallery Pavilion 2013」(イギリス、ロンドン、2013年)、「House NA」(東京都、2011年)、「武蔵野美術大学 美術館・図書館」(東京都、2010年)。受賞も多数。



深澤孝史 Takafumi Fukasawa

1984年山梨県生まれ。場や歴史、そこに関わる人の特性に着目し、他者と共にある方法を模索するプロジェクトを全国各地で展開。最近の主なプロジェクトは、《Football Field for Buffalo》「Thailand Biennale2018」(クラブ、2018)など。



風煉ダンス Furen-Dance

1990年林周一、笠原真志を中心に結成。小劇場から大劇場、巨大野外劇場、街頭劇と幅広い演劇活動を展開。本濃研太、青山健一などの美術家や「渋さ知らズオーケストラ」などの音楽家、生け花龍生派など様々な表現者とのコラボレーションを行う。



カルロス・ガライコア Carlos Garaicoa

1967年キューバ、ハバナ生まれ。製図工として務めた兵役時に製図技術を身につける。90年代初頭より首都ハバナを拠点に都市や建築を美学的・社会的な観点から分析することで見えてくる政治やイデオロギーを考察する写真作品やインスタレーションを発表し続けている。



五所純子 Junko Goshō

1979年大分県生まれ。文筆家。『週間金曜日』書評委員。手書きブログが好評。突然ダンボールのダンサーやラストデイ・ビキニの一員としてDJも。著書『スカトロロジー・フルーツ』。共著『ゼロ年代の音楽ビッチフォーク編』。渋谷アップリンクにて、毎月モノログ90分の書評ライブパフォーマンス『ド評』を行っている。



長谷川仁 Jin Hasegawa

1972年北海道生まれ。社会学、プロダクトデザインを学んだ後アーティストとして活動を始める。社会とのつながり、自然とのつながりを皆で分かち合いたいとの想いで様々なプロジェクトを行う。



石田真澄 Masumi Ishida

1998年埼玉県生まれ。2017年5月自身初の個展「GINGER ALE」を開催。2018年2月、初作品集「light years -光年-」をTISSUE PAPERSより刊行。2019年8月、2冊目の作品集「everything with flow」を同社より刊行。雑誌や広告などで活動。



石塚元太良 Gentaro Ishizuka

1977年東京都生まれ。パイプライン、氷河、ゴールドラッシュなどの特定のモチーフを世界中で撮影し続ける彼のスタイルは、ドキュメンタリーとアートの間を横断するように、時事的な話題に対して独自のイメージを提起している。



磯辺行久 Yukihiisa Isobe

1935年東京都生まれ。1950年代から版画を制作し、60年代にワッペン型を反復したレリーフ制作し一躍注目を集めた。1965年ニューヨークに渡り、エネルギーなど環境芸術を学び始めてから作風は大きく変換し、バイオや地質や気象など環境を構成している情報と色彩や形といったアートの伝達ツールを重ね合わせた。



伊藤キム Kim ITOH

1995年「伊藤キム+輝く未来」を結成。2011年「輝く未来」を解散。2014年「六本木アートナイト2014パレード」の監修。小中高生へのワークショップや振付、おやじが踊って給仕する「おやじカフェ」のプロデュースを国内外で行う。2015年「新カンパニーGERO」を結成して10年ぶりに創作活動を再開。



岩間賢 Satoshi Iwama

1974年千葉県生まれ。東京藝術大学美術学部後期博士課程修了後(ph.D)、文化庁芸術家在外研究員として中国で創作活動。場と人の対話を生み出す作品や舞台、プロジェクトなどを国内外で展開。愛知県立芸術大学美術学部准教授。月出工舎統括ディレクター。



ザンナ・カダイロバ Zhanna Kadyrova

1981年ウクライナ、ブロヴァリ生まれ。ガレリア・コンティニューア(ハバナおよびサン・ジミニャーノ)、文化翻訳局(ライブツィヒ)、クンストラムインスブルック(オーストリア)などで個展を開催してきた。2019年には第58回ヴェネツィアビエンナーレにも参加。



開発好明 Yoshiaki Kaihatsu

1966年山梨県生まれ。観客参加型の美術作品を中心に、2002年にPS1 MOMA、2004年にヴェネチア・ビエンナーレ第9回国際建築展、2006年に「越後妻有大地の芸術祭2006」に出品。2016年市原湖畔美術館にて個展。2019年東京都現代美術館「あそびのじかん展」に参加。



鍛冶瑞子 Mizuko Kaji

1981年神奈川県生まれ。妹島和世+西沢立衛/SANAAにて建築設計を行った後、服飾を学び、ニューヨークにて劇場系のコスチュームデザインを行う。Atelier MIZUKO KAJI主宰。建築・服飾・舞台での経験を融合した作品づくりを行っている。



キム・テボン Taebeom Kim

1980年愛媛県生まれ。Architectural Association School of Architecture(AAスクール)卒業。韓国にて建築事務所勤務後、インスタレーションや触って遊べる体験型アート作品を制作・発表。現在、東京藝術大学美術学部建築科教育研究助手。



木村崇人 Takahito Kimura

1971年愛知県生まれ。「地球と遊ぶ」をテーマに、自然現象を世界の共通言語として捉え、国内外で作品制作やワークショップを行なっている。代表作に「木もれ陽プロジェクト」「カモメの駐車場」「雲になる日」「森ラジオステーション×森遊会」など。



来田広大 Kodai Kita

1985年兵庫県生まれ。2010年東京藝術大学大学院油画技法材料研究室修了後、各地でのフィールドワークをもとにインスタレーションや絵画を制作。2016年にポーラ美術振興財団在外研修員としてメキシコで研修。VOCA展、高松市美術館、メキシコシティなどで作品を発表。



KOSUGE1-16

2001年より、土谷享、車田智志乃の二人組のアーティストユニットとして活動。作品制作のきっかけは、ありふれた環境や、現象、人のつながりにある。作品を介在させることで鑑賞者を参加者として変質させ、参加者同士、あるいは作品と参加者の間に「もちつもたれつ」という関係性を構築していく。



栗真由美 Mayumi Kuri

金属を素材とした作品制作からスタートし、近年は明かりや電機などを用いた立体作品制作を行う。なかでも、地域に赴いて巡り収集した画像や素材を用いて制作するインスタレーション作品は、自身の継続的なプロジェクトとして取り組んでいる。



クワクポリョウタ Ryota Kuwakubo

1971年栃木県生まれ。98年に明和電機との共作「ビットマン」を制作し、エレクトロニクスを使用した作品制作活動を開始。以来「デバイス・アート」とも呼ばれる独自のスタイルを生み出した。2010年の「10番目の感傷（点・線・面）」以降は、光と影によって観る人自身が内面で体験を紡ぎ出すような作品に着手。



トーマス・レーメン Thomas Lehmen

1963年ドイツ、オーバーハウゼン生まれ。振付家。主にコミュニケーション、人間間に存在する創造的な関係性に関心を持ち、世界各地でプロジェクトを展開。欧州を中心にアリゾナ大学などの様々な研究機関で教鞭をとる。



前田エマ Emma Maeda

1992年神奈川県生まれ。2015年東京造形大学卒業。オーストリア ウィーン芸術アカデミーに留学経験を持ち、在学中からモデル、写真、ペインティング、朗読など、分野にとらわれない活動が注目を集める。雑誌やウェブサイトなどで連載多数。



時速30kmの銀河の旅 Journey through the galaxy at 30km / h

市原市在住であり、美しい色彩の油絵で人気を誇る洋画家の前田麻里、映画「メアリと魔女の花」などで知られる脚本家の坂口理子、ダンスパフォーマンス界注目株の美木マサオ。さらに、演劇界でお洒落で叙情的な作品を創り続ける高泉淳子を演出に迎え、キャストにはキャラメルボックスの鍛冶本大樹ほか実力派俳優が集合。



マー・リャン[馬良] Maleonn

1972年中国、上海市生まれ。美術学校卒業後、広告の世界に入り、商業映画の監督となり、中国国際広告祭の金賞を2回受賞。2004年、アーティストとしてのキャリアを開始し、グラフィックアート、ドローイング、インスタレーションアートを作成した。2012年、パブリックアートプロジェクトであるStudio Mobileを開始。



ラヴァル・モンロー Lavar Munroe

1982年バハマ生まれ。バハマとワシントンを拠点に活動中。絵画、彫刻、インスタレーションなど、複数のジャンルを横断するような作品を制作する。2015年のベネチアビエンナーレをはじめ、ニューオーリンズ・トリエンナーレやダカール・ビエンナーレなどにて作品を展示。



中崎透 Tohru Nakazaki

1976年茨城県生まれ。看板をモチーフとした作品をはじめ、パフォーマンス、映像、インスタレーションなど、形式を特定せず制作を展開している。2006年末より「Nadegata Instant Party」、2007年末より「遊戯室(中崎透+遠藤水城)」を設立。2011年よりプロジェクトFUKUSHIMA!に参加。



成田久 Hisashi Narita

1970年生まれ。1999年に資生堂入社。アネッサのCMで蛭原友里を起用し、楽曲にBONNIE PINK「A Perfect Sky」を使用したことで一躍話題に。マシエリやマキアージュ、ベネフィーク、HAKU、インテグレート、unoなど多彩なブランドのほか、CDジャケットやMVのアートディレクション等を手掛ける。



ウラジミール・ナセトキン Vladimir Nasedkin

1954年ロシア、イヴデリ(旧ソ連)生まれ。ロシア・アヴァンギャルドの主題を継承しつつ、それを新しい素材、技術を用いて表現することで、伝統と現代の融合を目指す。2000年代には国際共同アーティスト・イン・レジデンス「PIK」のリーダーとして、チベット、バイカル湖等で芸術プロジェクトを展開。



マリア・ネポムセノ Maria Nepomuceno

1976年ブラジル、リオデジャネイロ生まれ。ニットの彫刻で知られている。彼女の作品は、身体と自然、宇宙へのミクロとの関係を構築する。それは私たちの経歴や経験の記憶を作り、過去、現在、未来の間の出会いを促す。



ニブロール Nibroll

1997年結成。振付家・矢内原美邦を中心に、映像作家、音楽家、美術作家とともに、舞台作品を発表するダンス・カンパニー。舞台のみならず、美術館でのパフォーマンス、ビジュアル作品の発表などダンスや身体表現の可能性を追求している。



西野達 Tatzu Nishi

1960年愛知県生まれ。東京都、ベルリン在住。屋外のモニュメントや街灯などを取り込んで部屋を建築しリビングルームとして公開、あるいは実際にホテルとして営業するなど、公共空間を舞台とした人々を巻き込む大胆で冒険的なプロジェクトで知られる。



大野修平 Shuhei Ohno

1975年東京都生まれ。2001年多摩美術大学美術学部絵画科油画専攻卒業。



大杉祥子 Shoko Ohsugi

1990年長崎県生まれ。2017年東京藝術大学大学院修了。版技法を用いて身近な人物や事柄をモチーフに長崎版画のオマージュ、訪れた国や街をテーマにした紙人形などを制作。「LUMINE meets ART AWARD 2018-2019」(ルミネ新宿 ルミネ2)、あきる野市アーティスト・イン・レジデンスに参加。



岡博美 Hiromi Oka

1976年三重県生まれ。京都造形芸術大学大学院在籍中に染工房「呼吸-kokyuu-」を設立。染織技術を活かしたインスタレーションや平面作品など国内外で作品を発表。藍染など天然染料の研究も行っている。



岡田杏里 Anri Okada

1989年埼玉県生まれ。2014年から国内外の小学校で地域参加型の壁画プロジェクトを始動。2016年東京藝術大学修士課程修了後、ポーラ美術振興財団在外研修員としてメキシコにて研修。メキシコと日本を拠点に創作活動を行う。



小沢敦志 Atsushi Ozawa

1979年栃木県生まれ。2003年武蔵野美術大学 工芸工業デザイン学科金工専攻卒業。東京都立川市にOZA METALSTUDIO設立。



アレクサンドル・ポノマリョフ Alexander Ponomarev

1957年ロシア、ドニエプロペトロフスク(旧ソ連)生まれ。海に憧れて航海士となり、7つの海を旅する。1982年に美術界に戻り、海、船をテーマとする作品を展開。2017年にはコミッションナーとして第1回南極ビエンナーレを実施した。



篠崎恵美 Megumi Shinozaki

栃木県生まれ。独自の感性で花にまつわる様々な創作を行う。2015年、自身初のフラワーショップ“edenworks bedroom”を立ち上げる。2017年、紙の花のプロジェクト“PAPER EDEN”を発表。2019年、花を捨てずに未来に何を残すか考えるコンセプトショップ“PLANT by edenworks”を開店。



塩月洋生 Yosei Shiotsuki

1973年宮崎県生まれ。藁と土でつくるストローベイル建築に着目し、2006年に「はさ掛けトラスト」を立ち上げる。岐阜県白川町に移住し、里山での暮らしを軸にセルフビルドで自邸の建築を続けている。2017年一般社団法人アートアンサンブル白川を設立。



曽我英子 Eiko Soga

東京都生まれ。イギリス在住。「伝統的」と呼ばれる物や考え方に着目し、それらの背景にある文化や歴史がどのように現代に潜む問題に関連しているのかを考察する。出会う人々との記憶を辿りながら制作を行い、それらを、映像、テキスト、インスタレーション作品として発表している。



鈴木敦夫 Atsuo Suzumura

1981年岐阜県生まれ。東京藝術大学大学院壁画研究室修了。イタリアの教会の壁面モザイクの修復、歌舞伎座の舞台美術などを経て、モザイクやフレスコを中心に作品を発表。現在、東京藝術大学後期博士課程在籍。



竹腰耕平 Kohei Takekoshi

1992年岐阜県生まれ。2017年京都精華大学大学院芸術研究科立体造形領域修了。近年の主な展覧会として2017 Gæste8telier HollufgFrd - 8rtist in residence /デンマーク Odense、2018 蕪崎町 まちなか美術館構想〈幸福の小道賞〉/山梨などがある。



竹村京 Kei Takemura

1975年東京都生まれ。高崎市在住。ポーラ美術振興財団在外研修員としてベルリンにて研修。代表作としてドローイングの上に刺繍を施した布を重ねたインスタレーションがある。シドニー・ビエンナーレに参加するなど国内外の美術館や芸術祭で作品を発表。



高山夏希 Natsuki Takayama

1990年東京都生まれ。2016年東京造形大学大学院 造形研究科 美術専攻領域 修了。最近では、2019年「Mnēmosynē」DESIGNART TOKYO 2019内(Brooks Brothers 青山本店/東京)などの多数の個展の開催、及び「群馬青年ビエンナーレ2019」(群馬県立近代美術館/群馬)などグループ展に参加。



高田安規子・政子 Akiko & Masako Takada

1978年東京都生まれ。東京都在住。一卵性双生児の姉妹でユニットとして活動。身近なものを素材に、縮尺や時間を自由に組み替え「スケール(尺度)」を主題に制作。また展示される場を読み解き、そこにあるものを活用したり空間を考慮して、場との繋がりのあるインスタレーションを行なう。



田中奈緒子 Naoko Tanaka

1975年東京都生まれ。ベルリン在住。東京藝術大学大学院修士過程修了後、1999年デュッセルドルフ芸術アカデミーへ留学。造形芸術と舞台芸術が深く融合したインスタレーションを欧州各国をはじめ日本のパフォーマンスアート・フェスティバルなどで公演。



レオニート・チシコフ Leonid Tishkov

1953年ロシア、ニージニー・セルギ(旧ソ連)生まれ。医大在学中に画家となることを決意。パスタ、古着などの身近な素材を使ったオブジェ、アーティスト・ブック、絵本(「かぜをひいたおつきさま」徳間書店)、月のオブジェを世界各地で撮影するプロジェクトなど多くのジャンルで活躍している。



富安由真 Yuma Tomiyasu

1983年東京都生まれ。日々の生活における現実と非現実の狭間を捉えることに関心を寄せて創作活動を行う作家。科学によっては必ずしもすべて説明できないような人間の深層心理や不可視なものに対する知覚を鑑賞者に疑似的に体験させる作品を制作。



ヘラルド・バルガス Gerardo Vargas

1971年メキシコ、メキシコシティ生まれ。古い人形や日常的なものを組み合わせた彫刻、壁画、版画、インスタレーション作品を、ベルリン、スロバキア、日本などで発表。魔術的リアリズムの作風で見ると人を幻想の世界へと誘う。



エルモ・フェアメイズ Elmo Vermijs

1982年オランダ、ティルブルフ生まれ。建築デザイナー。地元の素材を使用して社会問題に関する新しい視点を生み出すため、空間と再生産プロセスの関係を研究している。最新のプロジェクトである「StagingWood」では、人間と森林のライフサイクルとの関係を調査している。



柳健太郎 Kentaro Yanagi

1969年東京都生まれ。1990年、アールヌーボのランプ展を観て衝撃を受ける。自分もガラスを生涯の職業にすることを決意し、様々なガラス業界で経験を積むために、職人として転職を繰り返す。2005年、個人工房を構え作家活動を始める。“社会性”や“愛”、“夢”などのメッセージを精度の高い技術で表現する。



米澤文雄 Fumio Yonezawa

1980年東京都生まれ。2002年に単身でNYへ渡り、毎年三ツ星を獲り続ける高級フレンチ「Jean-Georges」本店で日本人初のスー・シェフになる。帰国後は国内の名店で総料理長を務め、2014年から「Jean-Georges Tokyo」シェフ・ド・キュイジーヌ、2018年9月より青山「THE BURN」料理長に。



指輪ホテル YUBIWA Hotel

1994年に設立。廃工場やストリップ劇場、レストランなど劇場以外の場で活動を展開。演劇・ダンス・音楽・美術など多彩な空間演出で「性や暴力への衝動」と「食や生や死への本能」の表出をテーマに、女性の視点から女性の身体を通し女性の心象風景を描き、ステレオタイプな人間性やセクシュアリティに疑問を投げかける。




作品鑑賞パスポート

	一般	高校・専門・大学生	中学生以下
前売券	2,500 円	1,500 円	500 円
当日券	3,000 円		



※写真はイメージです

オフィシャルツアー・作品鑑賞パスポートの  asoview! オンライン販売

日本全国の「遊び」をネットで予約購入できるオンラインサービス「asoview!」で、作品鑑賞パスポートとオフィシャルツアーをオンライン販売します。

ツアー

会期中はガイド&ランチ付き日帰りツアーを実施。バスだけではなく、小湊鉄道やトロッコ列車も乗り継ぎながらアートを巡ります。さらに、トロッコ列車内では「指輪ホテル」のパフォーマンス作品を鑑賞できるスペシャルツアーです。詳細は公式ウェブサイトで開催開始時にお知らせします。

周遊バス

会期中は一部エリアを周る周遊バスをご用意します。時刻表等詳細は決定次第公式ウェブサイトでお知らせします。

駐車場

各会場(五井駅を除く)に無料駐車場をご用意します。お車でお越しの際はご利用ください。

アクセス

いちはらアート×ミックスの開催エリアへは、東京、横浜から鉄道や高速バスを利用して約1時間～1時間30分。車であれば40分前後です。羽田空港からも高速バスが運行されています。



鉄道を利用する

東京駅から 約1時間10分

※特急列車利用の場合

成田空港から 約1時間



高速バスを利用する

バスタ新宿から 約1時間30分

横浜駅から 約1時間5分

羽田空港から 約1時間



市原鶴舞バスターミナルから会場まで

市原鶴舞バスターミナルは、芸術祭会場に最も近い高速バスの停留所です。

東京駅から 約1時間

横浜駅から 約1時間20分

羽田空港から 約50分



※牛久タクシー：0120-322-897 / 蕨井戸タクシー：0120-745-811

車を利用する

会期中に限り、会場周辺および小湊鉄道周辺の駐車場はいずれも無料で利用できます。(五井駅を除く)
駐車場に停め、列車や周遊バスを利用することも可能です。

市川ICから	約1時間5分
湾岸市川ICから	約1時間
浮島ICから	約45分



助成



平成 31 年度文化庁
文化芸術創造拠点形成事業



令和元年度観光地域づくり育成支援事業
外国人観光客のための公衆無線 LAN 環境整備事業

参画プログラム

房総里山芸術祭 いちはらアート×ミックス 2020 は、日本文化の魅力を発信し、多様性・国際性に配慮した事業として、下記プログラムの認証を取得いたしました。2020 年、東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。多くの人々が交流するこの機会に、オリンピック・パラリンピックの文化プログラムに位置づけ、「房総里山」の名を冠することで、市域を超え、市原を中心とした里山の魅力を広く国内外へ発信します。



お問い合わせ

いちほらアート×ミックス実行委員会 事務局

〒290-0225 千葉県市原市牛久500(南総支所内1階)

市原市役所 スポーツ国際交流部 芸術祭推進課

TEL :0436-50-1160

Email:kokugei@city.ichihara.lg.jp